

花き振興法に係る基本方針に関する有識者検討委員会（第2回）

概要

- 1 日時：令和7年3月12日（水）15:00～17:00
- 2 場所：農林水産省農産局第1会議室
- 3 出席委員：柴田座長、久松委員、加藤（孝）委員、小久保委員、福永委員、田嶋委員、井上委員、西村委員、（web）小原委員（播磨委員代理）
（なお、欠席の堀切委員、加藤（久）委員からは事前に意見提出あり）
農林水産省：長峰園芸作物課長、大塚花き産業・施設園芸振興室長、森明課長補佐、田原課長補佐他

4 概要

農林水産省から新たな基本方針について説明の後、各委員から意見を聴取。
委員からの主な意見は以下のとおり。

【生産について】

- 生産がなければ消費が起きない。後継者問題が深刻。まず、ご子息など後継者がいるところに支援をするべき。また、再生産可能なものにするため、古くなってきている温室等を建て直す必要。生産者の高齢化が進む中、新規就農者を確保して生産規模が減少しないようにしていく必要。
- 地球温暖化で適地産地が移動しており、作目変更によって新たな栽培技術を習得する機会が必要。また、これからは小ロット多品種の時代で、栽培に手間がかかるようになる。これに対応した栽培技術の実証が必要。
- 資材、人件費等が上がっていく中で、日本の花の価格が安すぎて再生産できない。海外から見ても日本国内の価格水準が安すぎて、それが輸入の障壁にもなっている。海外からものが入ってこない、国内のものがないという現状でどうするか。再生産可能な価格でないと生産者は減っていく。生産者がニーズに応じたものを作るためには、価格を上げるしかない。
- 花き業界として、環境問題に対応していくことが大切。きれいだからと言っても、薬漬けであるならば消費者は買わない。MPSもあるが、生産者の8割、9割が取り組む環境配慮制度があるとよい。

- 生産者は今後数年で本当に激減する。新規就農対策で、親が改修しても補助を受けられるような仕組みが必要。また、若手の参入を促すためには古いハウスの修繕が必要。更なる支援がなければ、現行の令和 12 年の産出額目標 4,500 億円は達成できない。
- 夏場の高温対策は喫緊の課題。生産額は維持できても生産量は激減する。基本的に一年を通して需要より生産の方が少ないのが現状。資材高騰対策に努める必要。
- 研究の項目立てに違和感。生産、地球温暖化の対応、流通、輸出のそれぞれに研究について記載すべき。また、個別具体的な技術を記載するよりは、大枠としての方向性を示すようにした方がよい。「鮮度保持」より「品質保持」の方が、概念を包括する言葉であり適当。
- 第 1 回で発言した集出荷調製施設等の共同利用施設・機械の導入、既存施設の整備について記載いただき感謝。
- 産地には多くの小規模個人農家があり、県では個人農家の取りこぼしが無いように対応。大規模農家だけでなく、小規模農家への支援もお願いしたい。
- 定年退職した人の就農誘導も、新規就農の一つの選択肢なのではないか。
- ヒートポンプはボイラーよりも均一に温度コントロールができるメリットがある。その導入への支援はあるが、維持は対象外。更新も支援対象となるとよい。
- 北海道で普及指導員の定員が減る中、花きの普及指導員は特に少なくなってきたおり、花きに専門知識をもって対応できる普及指導員を増やす必要。

【流通について】

- 冠婚葬祭では茎の長い花が求められる一方、家庭用では短い花で十分など、同じ品目でも使用用途によって求められるものが異なる。このような需要の違いを考慮した分類で、消費・需要動向を生産者へフィードバックしていく必要。
- 卸売市場は日々の販売データを有しており、現在、15 社分のデータを吸い上げてサーバに蓄積。データのフォーマットも、例えば業態は葬儀、ウェディングなど 13 種類を設定。これらを整理することで、フィードバックできるのではないかと。また、産地の協力も必要になるが、L や 2L と基準が曖昧なものではなく、センチメートル単位など統一的な規格の登録ができるとよい。
- 物流について、パレットとともに台車を明記してあり感謝。
- 米国ではコールドチェーンが発達しており、出荷から小売まで 3～4℃で保冷され流通。一方日本では、保冷車でないもので運搬したり、市場で常温空間に置かれたりしている状況。また、日本の貯蔵庫は 7℃保管がせいぜい。コールドチェーンの意識を生産者、流通業者、小売業者の皆に浸透させる必要。市場の貯蔵庫をストックポイントとして利用すれば、農協では貯蔵庫を作る必要がなくなる。流通の段

階で常温に2、3日置いておくと、小売に届くまでには鮮度が落ちてしまう。

【輸出について】

- 国内で必要量に達していない中、輸出を増やすのであれば輸入も増やさないと、必要量を維持できない。国内で花が不足している中、輸出を行っている場合ではないのが実情。
- 農家レベルで輸出を意識している方はあまり多くないのが実態。当産地では、農協単位でグロリオサ、スイートピーを輸出しており、今後、輪ギクの輸出を検討している。
- 東南アジアの国々などの花き輸出国にとって、品質の要求水準が高い日本は、要求水準が低い中国と比べて魅力的な市場ではなくなっており、日本への輸出に積極的ではないのが実態。海外での生産について、政府主導で交渉を進めてもらえると、高温で我が国の生産が減った場合でも必要量を確保することができると思料。
- 例えばスイートピーでは、日本産は1～2月に需要があるが、それ以降はコロンビア産に代わられる状況。4、5年で花きの売れ筋が変わっていくので、それに合わせて新しい品種や花木などの日本の特徴のあるものを輸出できるとよい。
- インバウンドを捉えて、輸出拡大の足掛かりとすべき。

【消費について】

- 推し活の一環としてライブ等で花束、フラワースタンド等が使われているが、リサイクルできない材質のものが使われていたり、花を含め全てがゴミとなっていたりと問題があると聞く。例えば、リサイクルできる材質を使うようにガイドライン等を作成していく必要。
- 贈答に用いられる花の容器など、ゴミ問題を念頭に販売の方法を考えていくべき。
- 花店・消費者で廃棄される茎等が、バイオエタノールの研究によって資源になることで環境に寄与することにつながると思料。
- どう新しい需要を創出していくかが重要。当協会では、花と健康に着目した取組を進めている。研究機関と協力して、花の癒しに対するエビデンスを普及させたい。生けることで、お年寄りの方が元気になることを期待。
- ラッピングや花器の利用は仕方がないが、なるべくゴミにしないやり方を考える必要。フラワーデザイナーの技能が低いと、3日で枯れるものと7日で枯れるものをあわせて仕立て、結果として3日で廃棄となってしまう。また、生産者と話をした際、長茎で出荷してもアレンジメントの過程で茎の大部分が廃棄されることを知り、これがゴミになるのだったら真っ直ぐでなくてもいいのではという声があった。
- 小売が求めるものや条件を生産者へ伝えられるシステムを構築していく必要。

- 花や緑などの自然は、AI には対応できない部分。花育やはないけバトルなど、需要喚起の取組を推進する必要。一方で、これらの取組は単年度で成果を出すことが困難であるため、長い時間軸で効果を得ていく補助の仕方を検討する必要。
- 売れるものをつくることが生産の基本。需要を拡大させるためには、若い世代への働きかけが必要。

【その他】

- 研究開発と研究開発事業の違いがわからない。法律に基づき研究開発事業の範囲を規定していることは、理解したが分かりにくい。
- 育種の部分を別建てで記述してほしい。

【以上】